

# 特命! キケンな情事

*Misaki & Gaito*

---

御木宏美

*Hiromi Miki*

termity



エタニティ文庫

## 目次

特命！ キケンな情事

5

密着！ キケンなエレベーター

267

書き下ろし番外編  
悩めるゴールデンウィーク

285

特命！  
キケンな情事

## プロローグ

高級国産車の助手席に鈴木美咲は座っていた。運転席の建部凱斗をちらりとうかがい、またすぐ目を伏せる。

美咲と凱斗は、日本で三本の指に入る大手広告代理店に勤めている。

新入社員の美咲は、同じ課の先輩である凱斗にひそかな憧れを抱いていた。その彼に終業間際、「今夜つきあえ」と言われて、喜んで彼の車に乗ったのに――

そのとき美咲は、自分のスカートの裾が太ものの中ほどまであがってしまっていることに気づいた。

ヌードベージュカラーのストッキングに包まれた白い足が、夜の車中で淫らに浮かんでいる。

運転席の凱斗の反応を気にしつつ、美咲はスカートの裾をそつと引っ張った。

体重のわずかな移動で本革の座面が音をたてた。ほんのかすかな音だが、エンジンが切られた車内でははっきりと耳に届き、美咲を慌てさせる。

しかし、運転席の凱斗は美咲には目もくれない。

(どうして……)

灯りのない路肩に停まったまま動かない車。

(食事に行くんじゃないのかな……?)

てっきりそうだと思っただけなのに、凱斗は頬杖をつき、ある場所を見つめ続けている。

時刻は七時三十分になろうとしていた。エンジンが切られてまもなく二十分になる。息がつかまるほどの沈黙に耐え切れず、美咲はひそかなため息を落とした。

(この人いったい何をしているの……?)

ここは、とある閑静な住宅街の一角。高校卒業まで地方の田舎町で育った美咲でさえ、上京前からその街の名を知っていた。お洒落なカフェやレストランが並び、各国の大使館が集まる、ハイソサエティな街である。

美咲も大学時代に一度だけ訪れたことがあった。それは、パンケーキブームが盛りを迎えたころのこと。

女子四人、雑誌で紹介されていたカフェで豪華なデコレーションのパンケーキを食べ、住宅街を散策した。

都心とは思えないほど、静かで緑豊かな街並み。通りの左右に並んでいるのは洒落た

低層マンション。庶民には手の届かない超高級物件だ。敷地内に停まっている車はすべてラグジュアリークラス。通行人はみなセレブ風な装いで、外国人の割合も高い。美咲が暮らしている場所とは雰囲気が違う。今、凱斗が凝視している建物もヨーロッパの古い建物を模した瀟洒しょうしゃな外観のマンションである。

二人が乗っている車は、その玄関が見える場所に停まっていた。

闇に溶け込むネイビーブルーの車体。ナンバープレートに刻まれた数字は3。これは、車幅が広い車や、排気量が多い車を示すナンバーである。凱斗の車は、日本が世界に技術とデザインを誇るエグゼクティブカーなのだ。

父や親戚以外の男性と二人だけで車に乗ったのは、今夜が初めてである。

憧れの大人の女性になったようで嬉しくて、ドキドキしていたのに——  
路肩に車を停めたまま二十分近く会話もない。視線も向けてもらえない。

(どうして……)

美咲は膝ひざの上に重ねた両手を強く握りしめた。

そのとき、静まり返った車内にバイブレーター音が響いた。

小さな音だが、沈黙のなかでは驚くほど耳につく。

凱斗がスーツの上着の内ポケットからスマートフォンを取り出した。イヤホンがつい

ていて、その一つを片方の耳に押しこむ。

液晶画面が発する青白い光で暗い車内が少し明るくなった。

「——ああ、松永まつながは女のマンションだ」

無線のマイクを扱うようにスマートフォンを口もとにあて、凱斗は答える。

その名を聞いた美咲は心のなかで呟いた。

(松永って、あの松永部長……?)

松永は美咲が勤める会社の制作二部を統すべる男だ。高圧的な人物で、美咲が業務で封筒を届けた際に一悶着ひらちんせきあった。

(松永部長を待ってるの……?)

送迎だろうか。

それならこうしているのも納得できる。だが、それは凱斗の仕事ではないはず。

凱斗と美咲が所属するのは、庶務課。迎車の手配は総務課の仕事だ。

(どうして私まで……)

何か事情があつて凱斗が運転手をしているのだとしても、彼一人でいいはずだ。

松永が美咲にいい印象を持っているとは思えない。美咲のほうも、できるなら松永には会いたくなかった。

(……もしかして松永部長を送り届けてから、食事に行くつもりとか)

ちらと、そんな考えが頭をよぎったが、美咲はすぐに否定した。  
 (だって建部さんの様子は松永部長を待っているというよりも……)  
 まるで刑事ドラマの張りこみみだ。

(そういえば、松永部長宛ての封筒を届けたあと、庶務課のみんながおかしなことを言っていた。あの封筒の中身をスキャンしたとかなんとか……)

あのとき、凱斗たちは無断でなかをのぞいていたように見えた。それも封筒を開封することなく――

(開封せずになかを読み取るなんてことができるの……?)

それ以前に、他人宛ての郵便の中身を勝手に見てもいいのだろうか。

身を削られるような不安感が押し寄せ、心臓が嫌な音をたてる。

固く手を握りしめたまま、美咲は横目で凱斗をうかがった。

(この人、何をしているの?)

考えれば考えるほど、彼が張りこみをしているように思えてくる。けれど、凱斗は刑事や探偵ではなく、美咲も警察官ではない。

(刑事役の俳優さんになれそうなくらいハンサムだけど……)

凱斗は知性的かつ端整な容姿で、背が高く、スーツが似合っている。俳優やメンズ向けファッション雑誌のモデルができそうな正統派のハンサムだ。話し方や仕事ぶりから

も知性を感じられる。

さらに反射神経が良くて、力も強い。美咲が危ないとき、二度も助けてくれた。

一度目は初めて会ったときだ。雨に濡れた床で滑って転びそうになった美咲を腕一本で抱きとめてくれた。

二度目はお茶をこぼしたとき。美咲の悲鳴を聞いてすぐにそばへきて、火傷の心配をしてくれて――

『大丈夫か?』

どちらのときも、美咲を気遣う声はとても優しくかった。

その声は今も耳に残っている。

美咲は幼稚園から大学までずっと共学で、周りにはたくさん男性がいた。けれど、そんなふうにも男の人に助けてもらったのは初めてで、頼もしさに胸がドキドキした。

彼以上にステキな男性は東京中を探してもいないのでは、と思えるほどだ。

(でも、今はそんなことを考えている場合じゃないし……)

凱斗が何をしているのか、見当もつかない。

(私、何か危ないことにまきこまれた……?)

美咲は泣き出しそうになる。

東京で働くのは子供のころからの夢だった。

その夢がなくなって、この春、四年制大学を卒業して、広告代理店に正社員で就職できた。職場にいたのはとてもハンサムな男性<sup>ひと</sup>。

出会ったときから彼に惹かれていた。だから今日、彼に誘われたときは本当に嬉しかった。

だけど今、路肩の暗闇に停まったままの車内で、凱斗は美咲を無視して誰かと話をしている。

スマートフォンに向かって凱斗は、ああ、ああ、と相槌<sup>あいづち</sup>を打つばかりで、会話の内容はさっぱりわからない。

(いったいなんなの……)

置かれている状況が読めない。不安と緊張感に加えて密室の車内。息が苦しい。

それからしばらくして、ようやく凱斗の電話が終わった。

彼は、イヤホンを外す。

(……)

再び訪れる沈黙の予感に美咲はため息をついた。

「さっきからため息ばかりだな」

「……!？」

突然言葉をかけられて美咲は驚いた。

運転席へ顔を向けると、窓枠に頬杖をついた凱斗が美咲を見ながら薄く笑っている。

「あ……」

嘲<sup>あざわら</sup>るような彼の笑みに、美咲の頬は朱に染まった。

素知らぬふりをしながら美咲の様子をうかがっていたなんて、凱斗はイジワルだ。

美咲はうつむいた。

(私のことなんて忘れているみたいだったのに……)

握りしめた手に力がこもる。

けれど、凱斗はそれ以上何も言わなかった。

続く言葉を待ってみたものの、いつまでたっても彼は黙りこんでいる。

(……)

勇気を出して隣の様子をうかがってみた。

(え……?)

凱斗はこれまでのように、通りの向こうのマンションへ視線を戻していた。口もとの

笑みも消えている。

(そんな……)

美咲は再び不安にかられる。

(……)

とうとう美咲は勇気を出して問いかけた。

「松永部長を待っているんですか……?」

「だったら?」

美咲の質問に、凱斗は質問で答えた。

「あ……」

美咲は視線を落とす。

そっけない口調。おまけに振り向きもしない。

「あの、どうして私を連れて……」

「ああ、メシにでも誘われたと思った?」

言い当てられた美咲は顔を赤くした。

自分の価値を考えてみる——そんなふうに言われた気がした。

(……齢は八つも離れているし、私にはこれというとりえもない……)

美咲は先月大学を卒業したばかりだが、凱斗は三十歳。美咲から見れば彼は人生経験の豊かな大人だ。

それに、長身でモデルや俳優みたいな外見の凱斗に対して、美咲は十人並み——どこにでもいる容姿だった。

自分がさほど魅力的でないことはわかっている。身長も、バストのサイズも、二十代

女性の平均で、卒業した大学の偏差値レベルも中の中。

(やっぱり私じゃダメなの……?)

薄々察してはいたが、凱斗の思わせぶりの態度に、ほのかな期待を抱いていただけに落胆が大きい。

うなだれる美咲の耳に、とどめをさすような言葉が入ってきた。

「庶務課が追い出し部屋つてこと、もう聞いているんだろ? 地下の薄汚い部屋で一日中、荷受け作業。どうして辞めないの?」

美咲は目の前が真っ暗になった。

(私、不要な社員なの……?)

硬直する美咲の前で、凱斗は画面の光が消えたスマートフォンをフロントボードの上に置いた。無造作に置かれたスマートフォンは強化プラスチックの上を滑り、フロントガラスにあたって硬い音をたてる。

美咲は膝の上で重ねた手を再度ぎゅっと握りしめた。

「……」

答えようと思ったが、声が出ない。

凱斗は窓枠に頬杖をついて美咲の反応をながめている。

「……」



美咲は苦勞して一つ息をついた。そして声を絞り出す。

「……私だって本当は上の階で働きたいです……」

声が震える。

「夢と希望と憧れを抱いて入った会社なのに、あんな地下の部屋で……」

凱斗は黙って聞いている。

美咲は言葉を続けた。

「……でも、ここで辞めたら、次の就職は難しいから……。大学の就職センターが、入社してもすぐに辞めるような人間は、もう一度就職活動をしても、社会人としての自覚や忍耐力に欠けると思われて評価が下がるから、再就職は難しいって……。だから、がんばるしか……」

「ふーん……」

凱斗が気のない相槌あごづちを打った。

「俺がいるから、じゃないんだ」

「えっ!？」

自然と視線を落としていた美咲は、凱斗の言葉に思わず顔をあげた。

「あ、いえっ、それはそのっ……」

凱斗は頬杖をついて美咲の顔を見つめている。

美咲の頬が真っ赤に染まった。

「……あ、あの……」

顔を伏せる。恥ずかしくてまともに凱斗の顔が見られない。

「……建部さんのことは、ステキだと思います」

美咲は蚊の鳴くような声でかろうじて答えた。

凱斗がいたから――

不本意な職場環境でもがんばろうと思えたのは、凱斗が言った通り、彼がいたからという面もたしかにある。

だが、凱斗からのリアクションはない。

「……」

上目遣いにおそるおそる凱斗の顔を見ると、彼は照れるどころか泰然たいぜんとして、口もとには薄い笑みを浮かべていた。美咲はまた慌てて視線を落とす。

思いがけず本音を口にしてしまい、心臓が早鐘を打っている。

かすかに衣擦れの音がした。顔を伏せたまま様子をうかがうと、凱斗が窓枠にかけていた腕を下ろすのが見えた。

「今、つきあっている男はいるのか?」

「い、いえ……、いません……」

「ずっと?」

「……大学のときは……いましたけど……」

「けど?」

「……就活やらなんやらで、四年の夏前に自然消滅……」

美咲の言葉は尻すぼみになる。

(……どうして彼氏のコトなんか訊いてくるの……?)

緊張感で手のひらや脇の下がじつとりと汗ばんでくる。身体が熱い。ブラウスの柔軟剤の香りが強くなったのが、自分でもわかった。香りは凱斗にも届いているはずである。狭い車内にいるのだから。

(やだ……)

美咲はスカートの上で強く手を握りしめた。

「その彼氏とは?」

「え?」

「経験あり?」

「そ、そんなのっ。どっちでもいいじゃないですかっ。セクハラですっ」

「よくない」

「え?」

美咲は思わず顔を彼のほうへ向けた。

本革のシートがぎしりと鳴る。

凱斗が上半身を美咲の近くへ寄せてきた。

「た……」

端正な顔が間近に迫った。

「建部さんっ……!?!」

パニックになった美咲の目を見つめ、凱斗は言葉を続ける。

「答えるよ。そいつとやったのか?」

「一回……だけ……」

迫力に押され、美咲は喉の奥から答えを絞り出した。

「ほかのやつとは?」

「……っ」

首を横に振る。

気持ちがいっぱいいっぱい、何も考えられない。泣きそうだった。

逃げ出したいが、サイドウィンドーのすぐ横には白い壁が迫っていてドアが開けられない。顔をそらす美咲を間近で見つめ、凱斗は新たな質問を繰り返す。

「俺が好きか？」

「そ……これは……」

「好きじゃなきゃ車に乗らないだろう？」

声は笑っている。

「違いますっ」

美咲は思わず否定した。

「泣き顔も可愛い」

彼の吐息が肌をかすめる。

次の瞬間、温かいものが唇に触れた。

美咲は硬直する。

凱斗の唇が自分の唇に重なっている。彼は美咲の唇を強く吸った。

（う、そっ……）

そのとき、コツンという小さな音が聞こえた。

凱斗が顔を離す。美咲は彼の肩越しに前方を見つめた。

彼の背後の窓から白い光が車内に差し込んでいた。誰かがドアの向こうから懐中電灯で車内を照らしている。

逆光になって姿は見えない。

再び窓ガラスがノックされた。今度は二度。

凱斗が姿勢を戻してドアを少し開けた。ルームライトのスイッチは切られていて、ドアを開けても車内は無灯のままである。

男の声が聞こえた。

「不審車両が壁の前に停まっていると大使館から通報があったんですよ」

「すみません」

凱斗が苦笑気味に答えた。彼は落ち着きはらっている。それとは対照的に、美咲の心臓は壊れそうなほど速く動いていた。

「念のため免許証を確認させてもらえますか」

凱斗がスーツの胸ポケットから黒い革の長財布を取り出した。なかからカードを一枚引き抜いて男に差し出す。

運転席を照らしていた懐中電灯の光が消えた。二、三秒して、今度は真横から奥まで入ってくる。眩しい光が凱斗越しに美咲まで照らし出す。

美咲は恥ずかしくて顔をあげられなかった。

光が消えた。

男が誰かに向かって言った。

「確認しました。車中に若い男女各一名が乗車。特に問題はないと思われます」

了解、とノイズまじりの声が答える。

凱斗に免許証を返しながら男が言った。

「このあたりは大使館が多いので一時停車は控えてください」

凱斗は愛想よく答える。

「すみません、彼女を自宅の近くまで送ってきたところでして。以後、気をつけます」

「早く移動するようにしてください」

男はそう言うのと、ドアを閉めた。

やがて車の外からエンジン音がしたが、車内では、かすかな音にしか聞こえない。

オートバイが一台、そばを走り抜けていった。ハンドルを握っている男の背に、警視庁の文字が浮かんでいる。それは見る間に遠ざかっていった。

やがてオートバイが闇に溶けて見えなくなると、凱斗が笑いを含んだ声で言う。

「助けてと叫べばよかったのに。おまわりさん、この人が私に無理やりキスをつて」

「あ……」

美咲は小さく声をあげた。

凱斗の言う通り、たしかに今のは車を降りるチャンスだった。けれど、キスをされた驚きと、車のなかでそんな淫らな行為に及んでいたことを他人に知られた恥ずかしさで気が動転して、思いつかなかった。

凱斗は面白そうに嘲笑っている。

「まんざらじゃないってわけだ？」

「ちがつ……」

美咲は真っ赤になった。

しかし、はずれてはいない。

彼とキスした——ひそかに想いを寄せていた人とキスをしたのだ。

温かくて乾いた唇。

触れた瞬間、彼は美咲の唇を強く吸ってきた。

一瞬、頭のなかが真っ白になった。でも、いやではなかった。

そのうえ、凱斗はなんと言っていた？

泣き顔も可愛い——

(私が可愛い……?)

好きな相手にそんなふうにも言ってもらえて、驚きと嬉しさに頭が真っ白になった。

(本当にそう思ってくれているの?)

心臓がドキドキしている。

膝の上で重ねた手を茫然と見つめている美咲の耳もとで声が出た。

「違う?」

その声のあまりの近さに慌てて顔を向けると、ぶつかりそうなほどすぐそばに、凱斗の顔があった。

「た、建部さん」

美咲は思わずドアのほうへ身体を引いた。

「違ったんだ？」

美咲の目を見つめ、凱斗は問いを繰り返す。

その口もとには薄い笑みが浮かんでいる。

「ホントに？」

「……」

美咲は視線を落とした。

サイドブレーキを越えて、端正な顔が迫る。

「俺が好きか？」

吐息が肌をかすめる。

「建部さん……」

美咲は戸惑いつつも、初めて凱斗に会った日を思い出していた。

## 第一章

入社日当日はあいにくの雨だった。それも春雨はるさめとは名ばかりの本格的な雨が夜から降り続けている。

おろしたての傘を手に、美咲は目の前のビルを見あげた。

灰色の厚い雲に覆おほわれた空に向かって、ガラス張りの建物がそびえたっている。地上

三十階建て、日本の三大広告会社の一つ電栄堂でんえいどうの本社ビルだ。

最上階付近は白いもやに覆おほわれていた。それがまるで、白い雲がビルのでっぺんを包

み込んでいるように見える。

大学進学と同時に、地方から東京に出てきて五年目。

この大都会には、目の前のビルより高い建物がたくさんあるが、ビルに雲がかかっているように見えたのは初めてだ。

雨の日に景色を見るため空を見あげたことなどなかった。

電車のなかではスマートフォンを見ているか眠っているかで、窓の外を注意深く見つめることもあまりない。

雲に届くビル。

まるで白い天井を支えている柱のようだ。

(すごい……)

感動に心が震えた。

都心で働くことは、小さなころからの夢だった。

美咲が生まれ育ったのは、四階以上の建物はほとんどない田舎町。百貨店は県庁所在地に一店だけ。鉄道は、昼間は一時間に一本で、移動の足はもっぱら車。初夏になればカエルの大合唱が夜の町を埋めつくす。

小学生のとき、大人になったら何になりたいかという質問に、同級生の女の子たちはみな、キーキ屋さんとか、看護師さんとか、身の回りにある職業を答えていた。けれど、美咲が抱いていた夢は、ドラマに出てくるような都会のオフィスで、スーツとヒールの高いパンプスを身につけて働く美人OLだった。

その夢をかなえるため、両親に懇願して東京の大学に進学させてもらった。

美人OL——は、ちよつと遠いが、それ以外は夢が現実になろうとしている。

(今日からここで私も働くんだ……)

ガラス張りの近代的な外観のビルを見あげると、わくわくした高揚感が湧き起こってくる。

同時に緊張感と不安も足もとからはいあがつてきた。

空を見るために少し傾けていた傘を戻して、美咲は周囲に目を向ける。

ビルのエントランスへ続く道の真ん中に突っ立っている美咲を背後から追いこし、電業堂の社員たちが続々とビルの中へ入っていく。

情報や流行の発信地にふさわしく、通り過ぎていく人は男性も女性も、いかにも業界人という雰囲気でお洒落だ。

入社試験や何度かあった内定者懇親会に来たときは、周囲は自分と同じリクルートスーツの学生だった。緊張感やおのほりさんの様な様子がみんなから漂ってきて、安心できたが、今は見知らぬ場所に一人で放り出されたような気分で心細い。

大学では情報処理を学んだので、パソコンソフトは一通り使い、キーボードはブラインドタッチで打てるが、ほかにはこれといった資格や特技はない。大学の偏差値は二流のレベルだし、英語力も日本人の平均並み。外見だって中の中だ。

(そんな私が業界大手の電業堂に入れるなんて……)

マグレとしか思えない。

美咲は慌てて首を横に振った。

(ダメよ、美咲！ 今日から社会人なんだからしつかりしなきゃ！)

不安の沼に沈みそうな自分に活を入れる。

ともかく、憧れだった世界のスタートラインに立てたのだ。

真新しい傘の柄を握りしめ、美咲はエントランスに向かつて一歩、踏み出した。入社試験、内定者懇親会と、何度か歩いた場所ではあるが、今朝は気分が違う。これからは社員として毎日歩くなんてと、心が躍った。

アプローチの先には扇形をしたガラス張りのエントランスが待ち受けている。ガラス壁からせり出した屋根の下に入って、美咲は傘を畳んだ。

目の前には二枚の自動ドアがあり、その両脇に高さ一メートルほどの四角い機械が一台ずつ置いてあった。出勤してきた社員たちは自動ドアをくぐる前に、その機械のなかへしずくの垂れる傘を入れて、すぐに引き出している。

周囲に倣って、美咲も傘を差し入れた。その傘は学生時代に使っていたような安物ではない。これからは社会人なんだから持ち物にもそれなりのものをと、親が地元の百貨店で買ってくれた、九千八百円のブランド品だ。

モーター音とともに風が勢いよく吹き出る音が聞こえる。傘を引きあげると、わずかに二、三秒なのに、水滴は見事に吹き飛んでいた。  
(すーい……)

さすが最先端の企業は違う。初めて体験する文明の利器に感動していると、三十過ぎくらいの女性ににらまれた。続々と社員がやってくる。途切れることのないその人波に

対して、機械は二台しかない。前に立っていると邪魔だ。

「すみせんっ」

美咲は慌てて機械から離れた。

自動ドアの向こうは広々とした三層吹き抜けのエントランスホールで、正面奥にエレベーターホールがあり、手前左側に受付カウンター。始業時刻前だが、カウンター内にはすでに二人の受付嬢の姿があった。エレベーターホールに入る左右の角には守衛の姿も見える。

美咲は深呼吸をした。

「おはよ」

歯切れのいい挨拶とともに肩をポンと叩かれる。

びっくりして振り返ると、長身の女性が立っていた。内定者懇親会で仲良くなった新入社員のなかの一人である。

「おはようございますっ」

美咲は反射的に手と足を揃えて頭をさげた。

「やだ。タメで敬語はやめてよ」

相手はおかしそうに笑った。女性にしては声が低い。

「それに、何かしこまって頭さげてるの、妹子」

からかうような声の調子で美咲の後頭部をつんつんとつつく。  
「そ、そうだよね」

妹子と呼ばれた美咲は焦りながら急いで頭をあげた。  
相手は肩を揺らして笑っている。美咲は初出勤に緊張しまくっているのに、彼女はそんな気配を微塵みじんも感じさせない。

彼女の名前は鈴木美咲。美咲と同名同名、漢字まで同じである。

だが、鈴木美咲が二人もいるとややこしい。そこで彼女についたあだ名が、姉御あねご。

凡庸ほんような美咲とは対照的に、こちらの美咲は百七センチを超えるモデルのような細身の長身で、目力の強いシャープな印象の美人だった。性格も剛毅ごうぎで、どんな場面でもひるまない。まさに姉御だ。

妹子はその姉御が美咲につけたあだ名だった。

内定者の間では姉御、妹子で定着している。

「雨なんてサイアク」

姉御はそう言いながら、濡ぬれた傘を無造作に送風機へ突っ込んだ。

「靴濡ぬれるっつーの。隣のホテルは地下鉄の駅とつながってんのにさア」

「う、うん」

姉御は黒いパンツスーツの下に、シャツではなく、胸もとが深く開いたUネックの

カットソーを着ていた。色は鮮やかな青。

足もとは爪先つまさきが尖ったポインテッドパンプスで、ヒールは細く、高い。

入社式にやってきた新人社員には見えない。この会社で数年働いているような風格がある。

思い返せば、彼女は内定者懇親会こんしんかいのときからそうだった。

美咲も含めてほかの内定者がみな上下揃いのリクルートスーツだったのに、彼女だけはスリムなパンツに色も素材も違うジャケットを合わせていた。

彼女も美咲やその他の内定者と同じ、この春に大学を卒業予定の学生だったのに。

空気を読み、周囲から浮かないことが必須の美咲たちの世代にとって、人生を左右する就職活動にみんなと違う服装なんてありえない。

たとえ内定者の懇親会であつてもだ。

（なんかすごい……）

気後きごれしていないどころか余裕すら感じさせる彼女に、美咲は圧倒された。

おまけにモデルのような美人だ。

美咲は自分たちへ寄せられる視線に気づいた。いや、自分たちではない。見られているのはもう一人の美咲だけだ。

男性はもとより女性までもが彼女を見ている。



周りにいるのはみな、広告代理店の社員である。職業柄、モデルや女優をじかに目にすることもあるだろう。

そんな彼らさえ注目する姉御。彼女には、それだけの華がある。

「……」

同姓同名で漢字も同じ二人を区別するためにつけられたあだ名、姉御と妹子。でも、彼女と並んだらまさにイモ子だ。

「自社ビルなんだから、気前よく地下道くらい掘れってーの——どうしたの、妹子？」

「う、ううん」

子供のころから憧れた高層ビルを前に、期待に躍おどった胸が少ししほむ。

「おはよー！」

そのとき、新たに二人の女子内定者がやってきた。

「姉御、妹子、久しぶりー！ 元気だったー？」

黄色い声ははじける。

「おー、久しぶりーって、一週間前に会ったじゃん」

長身のほうの美咲が肩を揺らす。

「えー、私、卒業式だったから懇親会行けなかったもん」

「え、あんた、いなかったっけ？」

「そっだよー。ねー、妹子」

「うん」

美咲は微笑を浮かべながら首を縦に振る。

一週間前にあつた最後の内定者懇親会に顔を出したのは三十人。彼女のほかにも卒業式と重なって来られなかった者が二人いた。合わせて、本日、電栄堂に入社する新入社員は三十三人。男女比はほぼ半々。

「ひどいっ。忘れられたっ」

「ごめんごめん」

「ショックーっ！ 私ってそんなに影薄いっ!？」

「だから、ごめんって」

騒いでいる女子は芸術系の有名大学卒業で、専攻は映像。コマーション制作部への配属を希望していると、いつかの懇親会で語っていた。

彼女にかぎらず、ほとんどの同期は広告代理店を目指して、大学でマーケティング論などの専門知識を学んできたキャリア志向ばかりだ。三分の二はこの会社でインターンシップも経験している。

あとからきた二人は、服装こそ美咲と同じようなフレッシュヤーズスーツに白いシャツの定番新入社員スタイルだが、性格的にはしんが強く積極的に前に出るタイプである。

ドラマのヒロインのような毎日を夢見て電栄堂を受けた美咲は引け目を感じていた。  
 (私もキャリア志向になったほうがいいのかな……)

美咲は、三人の後ろに並んでエレベーターを待つ。

前に並んだ三人は、大きな声で今日の入社式についておしゃべりをはじめた。

「集合場所、十四階の会議室だっけー?」

「入社式ってさア、社長とか役員の名長つたら面白い話がつきものだよねー」

その言葉に、もう一人が頷く。

「今日の研修も各部署の説明だって、人事の林さんが言ってたよ」

「うわっ、ヤバイっ、私、寝そうっ」

姉御が派手に声をあげる。

エントランスホールは劇場のように音がよく響く。美咲はその響きに軽く感動した。

「すご……」

「え?」

美咲の眩きを聞きつけて姉御が振り返った。

「何がすごいって、妹子?」

「あ、ごめんっ。音が——」

そう言いかけたときだった。

「——っ!?!」

つるりと足が滑った。

エントランスホールの床は大理石。雨のなかを出社した社員たちの濡れた靴によって、

水の膜ができていた。

「妹子!?!」

あ、と思った瞬間には身体が後ろに傾いていた。

はるか頭上の天井が目に映る。美咲は自分が倒れると悟った。

とっさに頭に浮かんだのは——

(スーツが濡れちゃうっ)

今日のために親が買ってくれたフレッシュヤーズスーツなのに。しかも入社式に染みだらけのスーツで出るなんて最悪だ。

けれど、なすすべはなかった。身体が落ちていく。背中から大理石の床に叩きつけられる衝撃を美咲は覚悟した。

「っと」

「——っ!」

背中に何かがぶつかった。

どしんと重い衝撃が背筋を駆けのぼって後頭部まで走る。

「妹子!?」

「妹子っ!」

「イモコ?」

同期たちの声にまじって、低い声が耳もとで聞こえる。

(……)

目を閉じている美咲は全身に意識をめぐらせた。

(濡れてない……)

美咲はピサの斜塔のように、不自然に傾いた姿勢で止まっていた。

背中の下に硬いものがある。

誰かがとっさに受け止めてくれたらしく、背中の下にあるのはその人の腕だ。

(た……すかった……)

身体じゅうの力が抜けた。

「おっと」

美咲を抱きとめている腕に力がこもる。男の人の声だ。

美咲は慌てて顔をあげた。

「……!」

安心して脱力していた身体が再び固まる。

目の前に男の顔があった。

(うそ……)

目に映ったのは頭を超がつく二枚目だ。

年齢は二十代後半か三十代前半くらいだろうか。きりっとした目もと、通った鼻筋、シャープな頬のライン。男性的な荒々しさと知性が同居した、絶妙な容貌。黒い髪は自然な感じで後ろに流している。メンズ向けファッション雑誌のモデルのようだ。実際、黒っぽいスーツがよく似合っている。

頭のなかが真っ白になった。

これほどにかっこいい男性と、こんなにも間近で向き合った経験は一度もない。

転びかけた恐怖とは別の理由で心臓が早鐘を打ちはじめた。

美咲を腕一本で抱きとめているその人は口もとをゆるめて微笑をみせると、硬直している美咲の身体を軽々と起こした。

「大丈夫か?」

端正な容貌に似合いの、魅惑的な低音の声。

「……は、……はいっ……」

自分でもわかるほどに、美咲は顔が熱くなっていた。

自分の足で立ったが、心臓がガンガン鳴っていて、まるで雲の上にいるように足もと

がふわふわしている。

「す……すみませんっ……」

転びかけても離さなかった傘の柄と、就活のときから使っているトートバッグの肩紐を握りしめ、声を絞り出す。気後れして相手の顔をまともに見られない。声も喉がつまって、いつもより高くか細いものになっている。

札の言葉を言うべきだったかもしれないが、気が動転していて思いつきもしなかった。

「新入社員？」

笑いのまじった声がかげられる。

「は、はい」

すると男が思いがけないことを言った。

「名前、訊いてもいいかな？」

「あ……、鈴木、鈴木美咲、です」

「ズキミサキさん、ね。気をつけて、ズキさん」

そう言うと、その人は美咲を残してエレベーターホール奥へ向かった。

カツカツと靴音を響かせて遠ざかっていく後ろ姿を、美咲は真っ赤な顔をして見送る。

エレベーターホールに集まっている社員たちのなかでも、目立つほど長身だった。

百八センチを超えているだろう。ピンと伸びた背筋。長い手足。均整のとれた身体。

後ろ姿も魅力的だ。歩きかたも堂々としている。

（かっこいい……）

心臓がドキドキしている。

「妹子！」

呼ばれて我に返った。

姉御だった。彼女たちと一緒にだったことを美咲はすっかり忘れていた。

「あ、だ、大丈夫」

「そんなことより、あんた、今の人の顔、見た!？」

一人の女の子が大きな声をあげた。

美咲を心配するどころか、目がらんらんと輝いている。

「う、うん」

「すごいじゃん！ あんなイケメンに助けてもらえてっ！」

もう一人の同期も同じだ。

「そ、そうだね」

「しかも、あんた名前訊かれたよっ！」

「う、うん……」

「ちよっとどういことっ。どういことよっ、このおっ」

二人に二の腕や肩を派手に叩かれる。姉御も口もとに薄い笑みを浮かべて美咲を見下ろしていた。

「や、やめてよ。どんくさいコとか思われたんだよ」

恥ずかしくてそう答えたが、美咲の心は躍っていた。

（あんな人がこの会社にいたなんて……！）

もちろん彼が美咲を気に入ってくれたかもしれないなんて、甘い夢は持っていない。

（でも……！）

都心の一等地に建つ超高層ビル。憧れの職場。そのうえ信じられないくらいイケメン——美咲はこれからはじまる社会人生活がいっそう輝く予感がした。

ところが——

「……ここ……？」

受け取ったばかりの辞令を手にエレベーターから出た美咲は、不安な気持ちであたりを見回した。

入社して一週間がすぎた。

この一週間は三十三人の新入社員全員で、研修に明け暮れる毎日だった。

内容は、社の歴史と広告業界の置かれている現状、そして社会人としての基本的な知

識やマナーの習得である。なかでも電話の応対と取引先へのメールの書きかたは、社外の専門講師からじつくり指導された。

何しろ小学生のころから携帯電話を所持していた世代である。電話は本人直通がありまえて、誰が出てくるかわからない固定電話は怖くて触れない。友人への連絡はメールで二言三言のみ。形式ばった長文に慣れていない。それが最近の新入社員像である。一流と謳うたわれている有名大学を卒業している美咲の同期たちの大半も、例外ではなかった。

だが、それでは社会人として通用しない。いくら名刺に携帯電話の番号が記載されていると言っても、デスクの上の固定電話は鳴るし、クライアントには官庁のお役人もいる。いまだきの若者だから、新入社員だから、では許されないのだ。そこで働いている以上、美咲たちは電栄堂の顔である。

よって始業から終業時間、ときにはそれを超えて夜の八時、九時まで、みっちり講義や実技指導を受けること一週間——三十三人の新入社員は本日、晴れて配属の日を迎えた。

だが——

総務部庶務課と書かれている辞令を手にした美咲が向かった先は、なぜか地下だった。エレベーターを出ると、そこは小さなホールになっていて、正面に地下駐車場に通じ

る通用口がある。社員は公共交通機関を使つての通勤が原則なので、社用車の使用が許される役員と来訪者のための駐車場だ。

社外の来訪者が通るため、ホールの内装にはそれなりの贅と意匠が凝らしてある。だが、地下なので当然、窓はない。しかも床や壁は重厚感を出すために暗めのトーンだ。(どうして……)

一流企業に就職できたのに。

憧れだった都心の一等地に建つ高層ビルなのに。

今日までの一週間、研修を受けていた上層階の会議室は眩しくらいに明るいオフィスだった——しかし、美咲が行くように指示されたのは地下。しかも、エレベーターから降りてきたのは自分一人。

美咲は泣きたい気分ですべてを握りしめた。

見える範囲にはオフィスらしきものはなかったの、美咲はそこにいた警備員に声をかけた。

「あの……、庶務課ってどこですか……?」

五十代後半か六十過ぎくらいだろうか、警備員は美咲の父親より年配のようだ。彼は「おらずと訊ねた美咲に、一瞬、意外そうな表情を見せた。

そしてすぐに、関係者以外立ち入り禁止と表示されている左手の扉をカードキーで開

けてくれた。

扉の表面は壁と同じ材質で、よく見なければ、そこに扉があるとは気づかない。目立たないようにしてあるのだろう。

「ありがとうございます」

美咲は丁寧に礼を言つて、開けてもらった扉を通る。

途端に景色が一変した。

社外の人間の目に触れるホールは立派だったが、扉の向こうは化粧壁がほどこされておらず、床も壁も天井も、コンクリートむきだし殺風景な内装だ。しかも狭くて薄暗い。幅は四メートルほど、奥行きは三メートル弱。

左側には部屋があつて、その部屋の窓から灯りがもれている。通路には照明がないので、その光が唯一の灯りだ。

美咲は窓から部屋のなかをのぞく。

どうやらそこは守衛室のようだった。中央に、脚が折たたためる長テーブルが向かい合わせに置いてある。

警備員の制服を着た数人の男性がパイプ椅子に座り、テーブルを囲んで話をしていた。周囲には古そうなデスクや書類棚が並んでいて、壁にはホワイトボードやカレンダーがかかっている。雑然としたオフィスで、社員らしき人の姿はない。

(……?)

美咲はますます泣きたくなかった。だが、他に部屋は見あたらない。

美咲は窓の脇にある扉をおさるおさるのソックした。

扉ではなくガラスの窓が音をたてて開く。

「はい?」

窓枠に上半身を乗りあげるようにして顔を出した警備員が首をかしげた。エレベーターホールにいた警備員よりさらに年配の男性だ。

「あ、あの、私、庶務課に——」

「ああ、庶務課さんならその向こうですよ」

最後まで言う前に、初老の警備員は穏やかな笑みを浮かべて、美咲が入ってきた扉の正面にある奥の扉を指さす。

「あ……」

ここが庶務課かと思つて落ち込んでいた美咲は安堵した。

「ありがとうございます」

「いいえ」

警備員は人あたりのよさそうな笑顔で答え、ガラス窓を閉める。

美咲は指示された扉を開けた。こちらの扉はスチール製で重く、周りのコンクリートに似たグレーとアイボリーの中間色の塗装がほどこされている。

扉の向こうはさらに殺風景だった。

床と壁と天井がコンクリート製なのは前室と変わらないが、奥行きが優に十五メートル以上はあつて、その広さが無機質な感じを強めている。

どうやらここは部屋ではなく廊下のようなようだ。そしてなぜか臭い。かすかだが、排気ガスの臭いがする。

入つてすぐ右側には両開きの大きなスチール扉があつた。この扉も灰色がかつたアイボリーのペンキが塗られている。

反対側の壁の手前には、荷物用のエレベーターが一機。そしてその向こうに扉が二つ並んでいる。

奥のほうの扉は開け放たれ、そこから灯りがもれていた。

「えっ!? 今日から一人入るんすかっ!」

開いている扉の奥から男の声が聞こえた。若い男だろう。張りのある元気な声だ。やたら大きい。

(私のこと……?)

美咲は辞令を握りしめた。

では、あそこが庶務課なのだろうか。

「女性がいたほうがいいと建部くんが言いましたね」

今度は穏やかな男の声をする。聞いた感じでは中年だ。

「前から申請していたんですよ」

「すぐ追い出すくせに」

「うるさい」

元氣な男の言葉に、横柄よこがへな声があがる。こちらは魅惑的な低音である。

「でも、このことはまだ何も教えていないそうですねですから、彦太郎げんたろうくんもそのつもりで」

「ういっス！」

聞こえてくるのは男性の声ばかりだった。それに上のオフィスとはあまりにも違いすぎる環境。

美咲は泣きたい気持ちで殺風景な通路を奥へと進んだ。

「あの……」

開いている扉の奥に向かっておずおすと声をかける。

「はいはい」

すると、メガネをかけた四十代なかばくらいの男性が戸口までやってきた。先ほどの

穏やかな声の主だ。

柔らかない声のイメージにぴったりの外見だった。身長は百七十センチに届かないだろう。男らしさや逞たくましさとは無縁の貧弱な身体つき。細い肩が少し手前に落ちている。そのせいで実際より小柄に見えた。服装はグレーのストラックスに、白いワイシャツ、濃いグレーのカーディガンと地味で、ネクタイもいたって地味な色柄。

メガネの奥の優しそうな双眸そうぼうが、フレッシュヤーズスーツで立ちつくす美咲を映して驚いたように見開かれた。

美咲は辞令と肩からさげたトートバッグの肩紐を握りしめた。

「あの、私……」

「ああ！」

男性は急いで愛想のよい笑みを浮かべた。

「今日から配属の鈴木美咲さんですね！ さあ、どうぞどうぞ！」

間違いであってほしいと祈っていた美咲の願いはこの瞬間、打ち砕かれた。

（やっぱりここが庶務課……）

倉庫のような地下の部屋だ。夢見ていた職場とはあまりにも違う。

美咲は本当に泣きそうになりながら、男性の言葉に従い戸口をくぐった。

「失礼します……」



「うわっ、可愛いっ！」

突然、大きな声が出た。

びっくりした美咲は思わず足を止め、その場に固まる。

長身の若者がばたばたと靴音を響かせながらデスクの間をぬうように駆け寄ってきた。年齢は美咲と同じくらいだ。

「美咲ちゃん？ 俺、梶彦太郎。ひこたろうと書いてげんたろう！ よろしく！」

彼は、辞令を握っている美咲の右手をいきなり両手で掴んで、上下にぶんぶん振り回す。

大型犬みたいな青年だった。身長は百八十五センチはあるだろう。肩幅もそれに比例して広い。逆に腰や下半身はぎゅっと引き締まっていた。プロテクターをつけたアメリカンフットボールの選手のようなマッチョだ。

身長と声だけでなく、顔も手も口も大きかった。目鼻立ちがはっきりしていて、眉が太い。少しバタ臭いが、まぎれもなくイケメンの部類である。まだ春だというのに、よく日に焼けた肌をしていた。服装はストレートのジーンズに、スタジャン、なかはTシャツとかなりカジュアルだ。

「す、鈴木美咲です……」

相手の迫力と無遠慮な態度に美咲は圧倒された。挨拶の際、初対面の男性に手を握ら

れたのは初めてだ。

「可愛いっ」

彦太郎は相好をでれでれに崩す。

「あ、あの……」

これほど可愛いと連呼されてあからさまに好意を示されたのも初めてだ。

困惑している美咲を見て、先ほどの中年の男性がやんわりと注意をしてくれた。

「彦太郎くん」

「あ！ ごめんごめん！」

ようやく彦太郎は手を離す。そして、その手で頭一つ分低い隣の中年男性を指さした。

「あ、こっちは課長ね」

美咲は慌てて頭をさげる。

「鈴木美咲ですっ。よろしくお願いしますっ」

「こちらこそ。マルモです」

はるかに若い彦太郎に無礼な態度をとられても嫌な顔一つ見せず、男性は丁寧な頭をさげる。

「え……？ マル……？」

「丸い毛と書いて、丸毛と申します、はい」

頭髮に三分の一ほど白いものが混じった課長はにこにここと答える。彦太郎とは対照的に、こちらは上司なのに言葉遣いも丁寧だ。

「それから——」

彦太郎が奥へと顔を向けた。

「あつちは建部さん」

彼の言葉と指の動きを追って、美咲も視線をめぐらせる。

「——!?」

美咲は驚きのあまり目を見開いた。

「あなたは……!!」

「へ？」

建部という男性ではなく、彦太郎が軽く声をあげる。

「建部くん、お知り合いですか？」

美咲の反応を見て、丸毛が言った。

「ちょっと」

訊かれた男は微笑を浮かべて曖昧に濁した。あの時と同じ魅惑的な低音の声だ。

（うそ!? 一週間も前のことなのに、憶えていてくれたの!?）

美咲の心は弾んだ。

そこにいたのは、入社式の日、エントランスで滑った美咲を腕一本で抱きとめてくれた、長身の男性だった。

着ているものは先日とは違うスーツで、長い足を軽く組んでデスクの端に腰をおろし、ゆったりと美咲を見つめている。その姿は、外国のお洒落なコマーシャルに出てくる男性のようにスタイリッシュで、見惚れるほどカッコいい。

「あ、あのときはありがとうございますっ!」

美咲は深々と頭を下げた。あわやというところを助けてもらったのに、きちんと礼を言わなかったことが気になっていたのだ。

あのあと、一緒にいた姉御以外の二人の同期に騒がれた。二人は、彼が名前を訊いたのは美咲を可愛いと思ったからだとか、運命の出会いだと言って、からかった。

そんな少女マンガのようなことが都合よく起きるはずはないと思っただが、それでも同じ会社に勤めているのだから、また会えるかもしれないと期待したのは事実だ。

けれど、同じ部署になれるなんて思わなかった。

何しろこのビルには契約社員やアルバイトなども合わせると千五百人以上が働いていて、五十以上の部署がある。

（それが同じ職場だったなんて……!）

「どういたしまして」

## 立ち読みサンプルはここまで